

## 平成 24 年度全学教授会

2013 年 3 月 19 日（火）に“くらまえホール”で全学教授会が開かれ、学長の挨拶に続いて、定年退職教員による挨拶がありました。退職予定の 32 名のうち、18 名の先生方にご出席いただき、お一人約 3 分で思いを語っていただきました。概要を以下に記します。（文責：広瀬茂久，写真：総務課総務秘書グループ）

### ----- 学長挨拶 -----

**三島良直**（学長）：定年になられる先生方への挨拶となると、何と云っていいか悩む。堅苦しい話では上から目線のように困るし、単に「おめでとう」というと喜んでいて困る。惜別と感謝の気持ちを込めて「おめでとうございます」と申し上げたい。長年にわたり教育・研究、さらには大学の運営に御尽力いただいたことにお礼を申し上げるとともに、これから平成 24 年度の全学教授会の形で先生方の思いを聞かせていただくのを楽しみにしている。今後の大学運営の参考にさせていただきたい。

### -----お別れの 3 分スピーチ（2012 年度版）-----

#### **西田信彦**（物性物理学専攻）



1984 年に助教授として本学に赴任して以来、28 年 6 ヶ月になる。物理実験の教育、研究に従事してきたが、優秀な学生に恵まれたお陰で、私自身も活性化され、アクティブに研究できたことに感謝したい。事務や同僚の方々にも大変世話になった。こうして無事に定年を迎えられたことは素直にうれしい。極低温センターとともに歩み、同センターを日本を代表する研究拠点にできたことは幸せだった。これからは、豊田理化学研究所でしばらく研究を続ける予定である。外から東工大をみることになるが、今までとは違った観点から東工大の発展に貢献してゆきたい。

#### **玉浦 裕**（化学専攻）



今年定年になられる同僚の先生方には「廃液処理では玉浦に世話になった」と思っていただけではないか。環境教育と安全教育の立ち上げを行い、安全手帳や環境報告書の編集・執筆を通して大学が果たすべき社会的責任の一翼を担ったことに充実感を覚えている。環境と安全に対してしっかりした考えを持ってはじめて一流の技術者になれるので、この流れは大切にしてほしい。もう一つ大切にしてほしいものがある。それは研究面でかかわったソリューション研究機構で、新しい社会システムを提案し作り上げることを目指して鳴り物入りで立ち上がった。これも継続してはじめて目に見える成果が生まれる。私自身はソリューションの卒業生として、東工大発ベンチャー「ソーラーフレーマー」を作り、それを育てていくつもりだ。いずれ アジアエネルギーネ

ネットワークを上げたい。

#### 渋谷一彦（化学専攻）



3 番バッターとして登壇させていただいた。前期高齢者の仲間入りをした気持ちは複雑だが、これが最後の打席かと思うと感慨深い。35 歳頃までは自分の研究に没頭する日々であったが、それ以降は大学の管理運営面を含め社会貢献にも心がけてきた。5 年間の外国生活を送ったが、この経験も大学の国際化施策に生かされたように思う。5 年前に教え子たちが還暦を祝う会を開いてくれたが、その時に学生から贈られた「先生、大還暦（120 歳）まで人生をエンジョイして下さい」という言葉を噛みしめている。学生たちをいい意味で洗脳するのが教員の役目だと思うが、その時の教え子から贈られたこの言葉は素直に受け入れ、洗脳されることにした。まだ人生半ばと思えばもう一仕事できそうだし、65 歳以降は自身がよりエンジョイできる方向にギアチェンジした人生を送りたい。

#### 上田 充（有機・高分子物質専攻）



平成 10 年から 14 年間世話になった。地方大学との違いを実感した 14 年間でもあった。充実した教育・研究環境を与えてもらったことに感謝したい。地味な分野で仕事をしてきたが、存在感を示すことができたのは優れた学生たちのお陰だ。4 月からは別の大学で特任や客員のポストで教壇に立つが、このポストを用意してくれたのが教え子たちで、私は幸せ者だ。

#### 北川 能（機械制御システム専攻）



本学には学生時代を含め 44 年間も世話になった。富山県の片田舎から上京したが、この道は幼い頃から決まっていた。母（88 歳）が生まれ育ったのが、今の緑が丘地区で、庭先からは本館の時計台が見えたそうだ。利発そうな東工大生のお話を母から聞かされているうちに、「行くなら東工大、なるなら東工大の先生」と思うようになっていた。優秀な学生にも恵まれ充実した教員生活を送ることができた。改めて次の 3 つに感謝したい：日本・東工大・東工大の皆様。

#### 宮内敏雄（機械宇宙システム専攻）



本学には 46 年近く世話になった。この間、よき師・よき学生に恵まれ、乱流の研究に没頭した。ここ数年は管理運営面でも多少のお手伝いをできたのではないと思う。節目の時に思うのはアインシュタインの言葉だ「教育とは、学校で習ったことをすべて忘れた後に残っているものである」。私自身何を残せたかと自問している。大学の使命の一つは学術の継承と発展であることに改めて思いをいたしている。本学には研究大学としての地位を確立してほしいと願っている。

#### 廣瀬茂男（機械宇宙システム専攻）



修士の時から本学に籍を置き 42 年になる。最初に本学の門をくぐった時の感慨が今も忘れられない。これまでロボット一筋で学生たちと一緒に 180 台近くを作り上げた。事務の方々のサポートにも感謝したい。地雷除去ロボット等、ようやく世の中の役に立つものも作れるようになった。4 月からは留学生が立ち上げたベンチャーで独創的かつ役に立つロボット作りに対する挑戦を続けたい。

#### 川島一彦（土木工学専攻）



平成 7 年（1995 年）に建設省土木研究所から本学に赴任して 18 年になる。この間、橋梁の耐震・免震・耐震補強の研究に従事し、国の技術基準策定にも携わってきた。2011 年東北地方太平洋沖地震では、1990 年以降の耐震技術の長足の進歩が地震動による被害の軽減に大きく寄与したことを知り、技術開発の有効性を強く認識した。つい先日、退職記念国際シンポジウムを開催していただいた。その時に卒業生達が各分野で活躍し、生き生きした姿をみて大変嬉しく思った。教員冥利につきるとはこのことだろう。充実した教員生活を送れたのはすばらしい同僚・友人・学生たちのお陰だ。定年後はさらに現在までの経験を活かし、地震に対して安全な社会の実現に貢献したい。

#### 持丸義弘（国際開発工学専攻）



学生時代を含めると 47 年間、人生の最盛期のほとんどを本学で過ごした。しかも計算好きだったので、コンピューター相手の毎日で、どちらかというとな変人（偏執狂）とみなされた。鉄クズと酷評する人もいたスパコン ETA<sup>10</sup>を使いこなし、複雑怪奇な流体の挙動を理論的に解析し、流体力学分野に貢献できたのは幸せだった。

#### 広瀬茂久（生体システム専攻）



こうして演壇に立たせてもらおうと、長きにわたって勉学と教育研究の場を提供してくれた本学に対する感謝の気持ちがこみ上げてくる。思い返してみると、高校 1 年の冬休みに、受験雑誌で「日本有数の理工系大学で、キャンパスの中を電車が通っていて 駅が 2 つもある」と聞いて「よし東工大に行こう」という気になったのだから不思議だ。星空の綺麗な田舎で育ったので、小さい時から「自然を読む」のが自分の仕事だと思い込んでいた。実際にはなかなか本を読むようにはいかなかったが、それでも何回かは学生さん達と一緒に達成感を味わうことができたから、何とか職責を全うできたのではないか。博士課程を終えた後、米国のテネシー州のバンダービルト大学で 3 年、その後、筑波大学で 6 年弱を過ごして本学に戻ってきた。この経験を教育研究や管理運営に生かされたかどうかは疑問だが、こうして定年を迎えて大学を見直してみると、水あつてのプールと同じように、自由に使える時間があつての大学ではないかと思える。鍛え甲斐のある学生が集まり、かつ若い人たちが研究に集中できる環境が維持されていくことを切望する。

#### 岡畑恵雄（生体分子機能工学専攻）



34 歳の時に東工大に呼んでもらい、独立の助教授として研究室を持たせてもらった。このことを一番喜んでくれたのが和歌山で工場を営んでいた祖父だった。「煙突の下に蔵前あり」の流れをくむ東工大は知る人ぞ知るで、その道ではあこがれの大学であり、孫がその教壇に立つことは望外の喜びだったらしい。世間の名声とは裏腹に、実験室の床をベニヤで修理し、カベのペンキを塗り直すことからスタートした。緑色に統一して気分一新と喜んだのも束の間、「ドアはグレーに統一されているので、勝手に色を変えられては困る」と事務からクレームが来て、泣く泣く灰色に塗り直した。出鼻をくじかれはしたが、あとは順調で、今はとても満足して東工大を去ることができ幸せいっぱいだ。ただ一つ気がかりなのは、7 類の将来だ。学部を持つ部局は大岡山に集まるのが望ましいので、生命理工を大岡山に戻すことに関して全学的なサポートをお願いしてお

きたい。今後は山形大学で研究を続けるので、東工大の皆さんとはライバルの関係になる。

#### 小杉幸夫（メカノマイクロ工学専攻）



1975年にすずかけ台の精研に着任して以来、42年間すずかけ台キャンパスを舞台に教育研究にたずさわってきた。フロンティア創造共同研究センターの第1期生として大型研究プロジェクトも推進させていただいた。振り返ってみると、助手時代は研究一筋で突っ走っていた感じだが、教授になると研究資金集めや報告書の作成などに忙殺された。独創性と研究費は反比例するという気もしないではないが、異分野融合では先導的な役割を果たせたのではないかと思う。疫学研究等倫理審査委員会の立ち上げでは多くの先生方のご協力を得ることができ、全学の倫理審査委員会の委員長職をとおして、本学の研究基盤の構築にも貢献できたことに満足している。

#### 前島英雄（物理情報システム専攻）



電気・情報系で定年を迎える3名の中の一人。14年前に本学に赴任したが、それまでの26年間は企業にいた。そんな関係で社会人博士を多く育てた。企業資金の導入にも努めたので、間接経費の獲得で大学に貢献できたのではないか。しかしながら大学全体として民間とのつながりを作るルートを確立できなかった点は心残りだ。

#### 佐々政孝（数理・計算科学専攻）



筑波大に一時居たときがあるが、1974年に助手に採用していただいて以来、本学で良い学生に恵まれて、充実した研究生活を送ることができた。コンピュータのプログラミング言語で書かれたソフトウェア（ソースコード）を機械語に翻訳するコンパイラのインフラ整備に心血を注いできた。人間がそもそも手で書くのは至難のワザであり、優れたコンパイラは不可欠である。バグ（虫くい）のためにソフトがうまく動かないことが少なくないが、このバグとの戦いの毎日だったといってもよい。定年後もこの闘い（虫退治）は続く。

#### 石井源信（人間行動システム専攻）



20年間、一般教育体育を担当するかたわら、カウンセリング懇談会等でも尽力させていただいた。大学院重点化後は、研究室を持つことへの責任を痛感した。専門分野の関係で外部の人に東工大の先生だと説明するのが難しいこともあり、単純に体育の先生ですという方が性に合っていたように思う。学生には実技として主にソフトテニス（軟式）を教え、講義では専門を生かしてスポーツ心理学関連の話題を取り上げた。これからは健康スポーツ科目を大切に、心身ともに健康な理工人を育てていただきたい。

#### 佐伯とも子（技術経営専攻）



専門の知的財産については、今話題の TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）の項目にも含まれているという説明をしなければならなかったと思っていたが、特許についてのご挨拶をされる先生もいてさすが東工大と感心した。10年半前に本学に着任したが、それまでの官庁、特許事務所、企業では、定年まではない管理職ポスト、又は定年のないポストだったので、このように大学で定年を迎えることができたのは幸せで、「おめでとう」といわれるとほんとうにうれしい。研究室は田町キャンパスだが、着任当初は大岡山の本館で、室の壁を新しく塗り替えたり、エアコンを取り替えたりした。数年後に新しい研究科に所属して新しい組織の運営の難しさを実感したが、それはよい経験であったと思っている。全学の委員会などを通して、日本の宝物のような先生方にお目にかかれたのは幸せだった。学生の指導という大変だが楽しい経験、修了生が社会で活躍している姿をみると感慨は何物にもかえがたい。

#### 長田 洋（技術経営専攻）



イノベーションマネジメント研究科で8年間 MOT の教育・研究に携わった。品質管理が専門だが、旭化成で26年間仕事をした後、山梨大を経て本学に赴任した。社会人として過ごした経験を生かして教育にあたり、満足すべき成果を上げることができた。人材をいかに育てるかに腐心し、講義は日本語以外に英語でもおこなった。これは内なる国際化の推進に寄与できたのではないと思う。今後は国内50%、エチオピアなどを中心とする海外50%の生活で、さらなる国際化に貢献していくつもりだ。来年からは私立大学の新設の学科でイノベーションマネジメントを担当することになっている。

有富正憲（原子炉工学研究所）



47年間、本学一筋で歩んだ。今なら、外で2年以上の修行を積んで来ないと教授になれないので生きた化石である。イエスマンになれない性格で、今から思うと冷や汗ものだが、よくつかかって行った。助手の時は好きな研究のみに没頭できたのが何よりもよかった。助教授になると研究費の獲得にも気をつかうようになった。科研費がコンスタントにとれるようになるまでは、高価な装置等は、まわりの研究室から借りる等の工夫をしながら、原子炉工学の発展に寄与し、日本のエネルギー基盤を支えているとの自負があったが、2年前の3.11の原発事故を経験し、くやしき、無念さ、申し訳なさで今でも頭がいっぱいだ。除染などを通して一日でも早く、廃炉と福島復興に貢献していきたい。更に、中小企業のアイドルとして物作り日本の復活に微力ながら貢献する仕事を行っていきたくて考えている。